

(2) 「神の独り子、我らの主、イエス・キリスト」

村上 伸

イザヤ書 42 章 1 節-4 節
フィリピの信徒への手紙 2 章 1 節-11 節

今日はいわゆる第 2 項と呼ばれているところ、イエス・キリストに関する信仰の告白の中の「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず」というところを取り上げたいと思います。この言葉は私たちに対して何を語っているのか、そのことを申し上げたいと思うのですが、最初にごく単純なことに注目しておきたいと思います。それは私たちの日本語では「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず」という風になっておりまして、イエス・キリストが一番最後に出てくるんですね。ところが、もともとの言語であるラテン語でもそうですけれども、最初に「イエス・キリストを信ず」というのが出てくるんですね。まず、私はイエス・キリストを信ず、そこから始まる。ほとんど逆なんです。これは日本語という言葉の性格にもよるんですけれども、よく言われますように、そうであるといっているのか、そうでないといっているのか、最後まで聞かないとよく分からない。日本語にはそういうところがあります。

今日のところはまさにそうでありまして、私は、出来れば、このところは、「イエス・キリストを信ず」という言葉で始めるように訳し変えた方がいいのではないかという気持ちが前からしておりました。とにかく原語の順序通りに申しますと、まず、「我はイエス・キリストを信ず」ということから始まるのです。

「イエス・キリストを信ず」というのは、もう少し言葉を補って申しますと、「イエスがキリストであるということ信じ」という意味です。キリストというのは、ご承知のように、メシアというヘブライ語のギリシア語訳です。「油注がれたもの」とか、「救い主」とかというような意味なのです。ですからイエス・キリストというのは名字とか名前というのではなくて、「イエスこそ救い主である」。あるいは、「イエスこそ油注がれた方である」という、大変簡潔ですがこれもまた、ひとつの信仰告白の形なのです。そこから始まっているということに先ず注意をうながしておきたいと思います。

「私はイエス・キリストを信ずる」。そのことの意味は何でしょう。福音書の場合も同じだと思いますけれども、使徒信条を最初に書いた人々は、何らかの抽象的な神の理念という風なものから始めたのではなくて、歴史の中に起こったイエスの事件によって強烈な印象を与えられたところから始めた。先ず最初に、「私はイエスがキリストであることを信じる」と述べた順序は、そのことを表していると思います。

それを更にもう少し展開致しますと、イエスがこの歴史の中に生まれた。そしてガリラヤという辺境の地で「地の民」と呼ばれる貧しい人々と共に生き、そして彼らを心から愛した、彼らの重荷を背負いこむようにして苦しめられ、みんなに捨てられて十字架の上で死んだ。そして復活した。このイエスの一生。説教の後で、賛美歌の 121 番をご一緒に歌いたいと思いますが、これは上原教会の方々に聞きますと、私たちがこれか

ら合同しようとしている上原教会では赤岩栄という牧師の指導の下に、だんだん賛美歌を歌わなくなったのだそうですが、この賛美歌だけはほとんど最後まで歌っていたということですね。

馬槽の中にうぶごえあげ、木工の家にひととなりて、貧しきうれい、生くるなやみつぶさになめしこの人をみよ。食するひまもうちわすれて、しいたげられしひとをたずね、友なきものの友となりて、こころくだきしこの人を見よ。すべてのものをあたえしすえ、死のほかにもむくいられて、十字架のうえにあげられつつ、敵をゆるししこの人を見よ。この人を見よ、この人にぞ、こよなき愛はあらわれたる、この人を見よ、この人こそ、人となりたる活ける神なれ

由木康先生の作で、大変優れた賛美歌だと思えますが、ここに言い表されているような彼の生涯でした。使徒信条を最初に起草した人々はこのイエスのできごとに非常に深い感動を覚えたものと思います。そしてこの方こそイスラエル民族が待ち望んだメシアである。この方こそイザヤが預言した主の僕であると信じたのでしょう。今日のイザヤ書の箇所はそのために選んだのですが、とくに42章。

見よ、わたしの僕、わたしが支えるものを。わたしが選び、喜び迎えるものを。彼の上にわたしの霊は置かれ彼は国々の裁きを導き出す。彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく暗くなっていく灯心を消すことなく裁きを導き出して、確かなものとする。暗くなることも、傷つき果てることもないこの地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。

こういう方がこられる、とイザヤは信じていました。そしてその人は、53章によりますと、人々の罪を背負って自分が苦しむ人物である。それがイエスという方において現実となったと福音書の記者たちは考えたのです。この信仰は使徒信条にも受け継がれた。ですから、「イエスがキリストであることを信じる」という告白が第一になされなければならなかったわけです。

そのあとに「独り子」という言葉が続いております。元の順序から言いますと、イエス・キリストを信じるという言葉のあとに「その独り子」が出てくる。イエスは「神の独り子」だと告白しています。これはどういうことでしょうか。

たまたまイエスという親切な人が現れて、抑圧された民衆と連帯して生き、彼らを愛したとか、そしてそのために死んだとか、それだけのことではないのです。親切な人とかやさしい人とか愛に満ちた人というのは、ありがたいことに、まだこの地上にいます。私たちの世界には、いやなことが沢山起こりますけれど、それでもやはり親切でやさしい人が私たちの身の回りに沢山います。私たちはその人たちの優しさに支えられて生きている。これは大変喜ばしいことに違いありません。

しかし、イエスのあの出来事、彼の生涯、彼の愛と生と死は、たまたまそういうやさしい人々の一人であったというのではない。苦しんでいる人々のそばにすることが実に神の本来の意志だということであらがい難くはつきりと啓示した、ということです。そ

の意味でこれは全く独自の事件であったといわなければなりません。神の独り子というのはそういう意味です。

そもそも、聖書の信仰においては、神と人間の間には無限の隔たりがあります。人間は神になることはできません。私たちのこの東洋の世界では、人間が神になるということは割に抵抗なく受け入れられています。死んだ人は神様として祀られたりします。しかし聖書の信仰では、そうではありません。人間は神になることは出来ない。神は絶対に人間を超越しています。人間は絶対に神になることが出来ない。「我のほか、何者をも神とすべからず」というのは十戒の第一戒です。

その上に、人間は神にそむいてその罪のために死の深淵に陥っている。だから人間の側からこの断絶を乗り越える術は全くないのです。ところが神がご自分の方からこの深淵を乗り越えて、人となってこのわれわれの世界に来られたというのが新約聖書の信仰でありますし、この使徒信条が言い表していることなのです。神は全く同じような人間の形をとってこの世に来られた。イエスというのはそういう方だった。だからこの世の苦しみも涙もどん底の絶望も死も残らず味わった。神がそういう風に私たちのところに来て下さったというのです。

私は若い頃へブライ人への手紙の4章15節の「イエス・キリストはあらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われた。」という言葉を読んで深い慰めを感じたことを覚えています。ほとんど私の信仰的な原点といたらいいでしょうか。神の子はあらゆる点において、私たち同様に試練に会われた。だから私たちは見捨てられた存在ではない。どんなに深い苦しみや悲しみを味わっている時にも、そのそばに神がおられる。

キリストが生まれた時に、マタイの福音書によりますと「その名はインマヌエルとなえられる。」と言われていました。「神が我らと共にいます」という意味です。神は人間を絶対に超越した存在ですけれども、しかし同時に、この世界の苦しみをよそに天上で涼しい顔をしているような方ではない。「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された。」(ヨハネの福音書3章16節)そのように私たちのもとに来て下さる方です。ですから神の子が人となったという出来事、受肉の出来事はボンヘッファーが言っているように、あらゆる奇跡の中の最大の奇跡だと私は信じています。それがイエスの事件において起こったのだ。これが聖書の証しするところです。

さて、その次に「我らの主」という言葉がでてまいります。これはどういう意味でしょう。このことを非常に深く、そして感動的に明らかにしている箇所が、フィリピの信徒への手紙2章6節以下でしょう。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

ここに「イエス・キリストは主である」という告白がでてまいります。主という言葉はギリシャ語でキュリオスと言いますが、これは古代オリエントの世界ではひんぱんに使われた宗教的な用語です。そしてその意味は、全てのものの支配者ということです。古代オリエントでは、自分たちの神々を「主」として表示する。そして、その主権を示すために、しばしば恐ろしい猛獣や怪物の像を刻んで飾りました。恐ろしい力を持ったものでなければならぬ、そういう像が沢山でてまいります。あるいは壮大で華麗な大伽藍を建てます。管をこらした神殿が建てられます。そしてそれらは全て高いところに造営されます。ギリシャではパルテノンの神殿というのがアテナイの一番高い丘のうえに建っているし、バアル礼拝の神殿、あるいは礼拝所は、高きところに建てられたと旧約聖書に書いてあります。力を象徴するものが高きところに建てられて支配力を誇示するというのが、このキュリオスの考え方でした。そして残念なことに、中世以降のキリスト教はやっぱり同じ轍を踏んだと思います。そもそもそういうことではなかったはずなんですけれども、力を誇示する大伽藍を建てる。そして本当に贅沢な美しい僧服をまとったローマ教皇が世界に君臨する、ということが行われました。歴史というものはひっくり返すわけにはいきませんが、今考えますと残念なことだと思います。

しかしパウロはこう言います。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

僕になった、というんですね。イエスは他の人々に仕えるために自らを低くして僕になった。マルコ福音書の10章に書かれてあることも同じ意味だと思います。「そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。『あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間ではそうではない。あなたがたの間で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来たのである。』」(42節以下)

自分を低くして他者に仕える方が主なのだ、とされているのです。私たちの主と呼ばれている方はそのような方なのだ。私は、このことを本当に大切なことだと考えています。私たちが「主イエス」と言います場合には、そういう内容を持っているのです。

ですから、この使徒信条を告白する者は、このキリストの生きかたにならって生きることとなります。そうでないと、使徒信条を告白したことにはなりません。使徒信条を告白する人は、自らを低くして他者に仕えるべきです。ですから、このフィリピの信徒への手紙2章3節にはこう書いてあります。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。」

主イエス・キリストの心を心とせよ、と昔の文語訳ではなっていました。使徒信条を告白する者はそのように生きていきます。

私は最近ペルー人のカトリック司祭で「解放の神学」の代表的な人物の一人と考えられているグスタボ・グティエレスという人が書いたものを読む機会がありまして、たいへん胸を打たれました。この人はペルーの首都リマのスラムへ入っていきます。動機は布教のためです。あの人たちはキリストのことを、本当の意味で知らない。教会のことも知らない。布教しなければいけない。そう思ってそこへ入っていったのですが、そこで恐るべき現実と直面いたします。衣食住に事欠くばかりか、教育もまったく受けられない。病気になってもお医者さんにかかるどころか薬もない。これが人間の生活か、というすさまじい現実なんですね。それに彼は愕然としまして、自分はノンクリスチャンに布教するためにここへ入ってきたけれども、この人たちはノンクリスチャンどころかノンパーソン、つまり人間ではない。人間人格として扱われていない。そういう生活をしている人たちがここにいるのだ。だから、ノンクリスチャンに布教をするなんていう考えではやっていけないと思って、彼はそこに住み込みます。そうしますと、この社会には、南米はおしなべてそうだとおられておりますけれども、構造的な不正がある。構造が間違っている。一握りの人々が国中の富を独占しているような状態で、今言ったように貧しい人たちは人間として扱われないような生活をしている。これは構造が間違っている。罪というのは「構造的な不正」のことである、ということが彼にはだんだん分かってきました。そして教会にも責任があると思うのです。教会もまた、そういうこの構造的な不正に寄り掛かるような生き方を今までずっとしてきたではないか。そういう生活の中でキリストを信じるということは一体どういうことなのかということに、だんだん目覚めていくのです。

上から他の人を見下ろして、ノンクリスチャンに布教してやろうと考えていた時には、自分は上から見下ろしていた。そういう者には信仰の真髄は分からない。イエス・キリストを信じる、と言ってはいても、上から見下ろしているような生活をしている限りそれは分からない。キリストご自身は自らを低くして他者の僕となった方でした。「我らの主イエス・キリスト」という短い言葉の中には、大切な意味が込められているということ、私はあらためて考えさせられました。

(日本基督教団みくに伝道所 1996年12月15日 礼拝説教)